

佐野 智成 社長の  
普段着的  
よもやまばなし



株式会社四日市事務機センター (YONJIM グループ) は、1974 年設立のオフィスの ICT 環境をトータルに支援する企業。IT 機器販売からネットワーク構築、セキュリティ対策、リノベーションやサステナブル事業まで幅広く展開し、「未来を笑顔に」を理念に地域企業の成長を支えています。三重県に日本一の事務機屋をと、創業 51 年を迎えた今も日々奔走する 2 代目・佐野社長に仕事と人生のリアルを伺いました。

仕事もプライベートも  
ボーダーレス  
全国のオフィスを巡り、  
日々ヒントを収集!

一社長の毎日の過ごし方を教えてください。

「朝の出社が楽しみで仕方ないんです (笑)。毎日が新しい発見の連続ですからね。」そう朗らかに話すのは、株式会社四日市事務機センターの佐野社長。51 歳の現在もその目は少年のように輝いている。

同社は、オフィスの ICT 環境をトータルに支援する地域密着型の企業。最新の IT 機器の販売からクラウド導入支援、セキュリティ対策、オフィスレイアウトのリノベーションまで、あらゆる業務をワンストップで手掛ける。そのトップが「出社が楽しい」と言い切るのは、何よりも「仕事が好き」だからだ。

「オフィスのあり方って、働く人の価値観や時代の空気を映す鏡なんです。だから私は“オフィス見学”をライフワークにしています。趣味であり、実益もある旅ですね。」

全国の企業やショールームを訪ね歩き、最新の働き方や空間づくりを肌で感じる。訪れる先は同業他社だけでなく、最先端のオフィスを中心に、カフェやホテル、美術館など多様だという。

「オフィスって“職場”というより、“人が集まる場”なんです。美味しい空気が流れている場所には、必ず人の笑顔がある。だから旅先で感じた“心地よさ”をどうオフィスに取り入れるか、いつも考えています。」

旅の楽しみのひとつは、やはりご当地グルメ。「その土地でしか味わえない料理や人との出会いが、結果的に新しい発想につながるんです。仕事とプライベートの境界はあってないようなものですね。」

社内では新しい IT 機器を自ら試し、面白いと思ったソフトやツールはすぐに導入。流行のテレビドラマや映画もチェックして、気づいたことは即共有する。「作品の中に登場するオフィスやチームの在り方からも、学ぶことはたくさんあります。例えば、“人が生き生き働く空間”の演出方法など、実はすぐ真似できるヒントが潜んでい



るんですよ。」社員全員が自由に意見交換できる社内システムを整え、良いと思ったことはスピーディーに実行。「些細なことも拾い上げられる“風通しのよさ”が、会社の成長エンジンだと思います。」

現在は奥様との二人暮らし。成人した息子さん二人はそれぞれの夢に向かって羽ばたいている。「仕事も家族も、私の人生を支えてくれる大切な仲間です」と微笑むその姿に、人生と仕事を心から楽しむ経営者の姿が映る。

「仕事を好きにならないと、  
いい仕事はできない」

一家業を継ぐことを意識されたのはいつ頃ですか?

「物心ついた頃から“いつかは自分が”とっていました。」現会長である父が母とともに創業。自宅兼オフィスを現社屋の地に移したのは、佐野社長が就学前のことだった。

「両親はいつも忙しくて、家庭らしいことといえば、たまの日曜日の父の手料理くらい。でも、その姿を見て“働くってこういうことか”と自然に感じていました。」



父は営業の最前線に立ち続けるカリスマ的なトップセールスマン。一方、母は人を思いやり、従業員を大切に作るムードメーカーだった。「父が“成果”で会社を引っ張るなら、母は“人の心”で会社を支えていた。そんな両親を見て育ったことで、チームワークの大切さを肌で学びました。」

高校卒業後、パソコン専門学校を経て大手メーカーに入社。飛び込み営業の中で、お客様へのアフターサポートの大切さを感じ、私を信じていただけることへの喜びが“お客様と長つながる”ことの意味を知った。「売って終わりではなく、使い続けていただくことが私たちの使命だと学びました。」

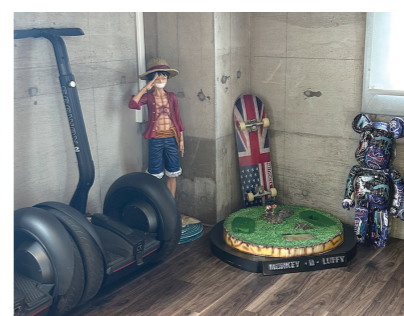


26 歳で結婚を機に家業に戻り、社業改革に挑戦。当時の売上 9 割以上を官公庁が占めていた状況から、民間企業への販路拡大を進めた。「父と意見がぶつかることもありましたが、母が間に入って“あなたらしくやりなさい”と背中を押してくれた。あの一言が大きな転機でした。」

2009 年にはクラウドシステムとタブレット PC を業界でいち早く導入。顧客情報をクラウドで一元管理し、修理履歴や評価、クレームまで共有できる体制を整えた。

「父は“赤字になったら責任取れよ”と笑いながらも、やらせてくれた。その懐の深さがありがたかったですね。」結果、最新の技術で仕事量が 5 倍以上に増えても対応が可能となり、効率化によりチーム全体の生産性も上がり、業績が当初の 4 倍以上に成長することができた。

「父の“仕事を好きにならないと、いい仕事はできない”という言葉も、今も胸に刻んでいます。」



創造力の源は“観察と行動”  
気になったらすぐ試す、  
それが佐野流

「映像作品や SNS など、あらゆるメディアがインスピレーションの源です。面白いと思ったらすぐ試してみる。それが私のやり方です。」流行のドラマや映画を観て、舞台となるオフィスのデザインや登場人物の動き方を研究。

「社員の座る距離感や照明の明るさ、音楽の有無一。そうした細部が“居心地の良さ”を左右するんです。」趣味でもあるオフィス巡りから得た気づきを、社内環境や顧客提案に即反映。「自分たちが使ってみて本当に良かったものしか、お客様には勧めません。」DX 化を推進する同社の提案には、すべて“実体験”が裏打ちされている。



“社員と家族の笑顔”が  
会社の力に  
地域に愛される企業を  
目指して

「仕事の効率化だけが DX ではありません。社員やその家族が笑顔でいられる環境づくりこそが、本当の意味での“働き方改革”です。」

息子さんたちのサッカーの試合で見た、保護者の温かなサポートに心を打たれた経験が、今の考え方の原点だという。

「“家族もチームの一員”という考え方が自然に芽生えました。」同社では独自の福利厚生アプリを導入し、社員の子どものランドセル支給や、塾の費用や家族の誕生日イベントをプレゼントするなど、ユニークな制度を展開。「社員の笑顔が家族に伝わり、家族の笑顔が社員を支える。そんな好循環を作りたいんです。」



オフィスもまた、社員がリラックスして働ける空間に。カフェのような打ち合わせスペースや、遊び心あるオフィス家具、コンセプトの異なるミーティングルームなど、社内はユニークで創造力が掻き立てられるような空気に満ちている。SNS を活用した社内コミュニケーションも活発で、社員同士が日常の気づきや感謝を共有。

「働く人が笑顔で、家族も笑顔で、地域も笑顔になる。そんな循環をつくるのが、私たちの使命です。」地域の中小企業が元気になることが、街の未来を明るくする一。佐野社長の言葉の端々に、その信念が息づいている。



社長として、経営者としての顔だけでなく、ひとりの人間としての言葉が随所に感じられた今回の「トップの素顔」インタビュー。次回は、株式会社〇〇〇〇の〇〇〇〇社長のトップの素顔をお届けします。お楽しみに!